本願の名号

――氷上燃火の譬喩によりて――

曾我量深

1

曇鸞大師の『往生論註』をみますと「同一に念仏して別の道無きが故に、遠く通ずるに夫れ四海の内、皆、兄弟とするなり」というお言葉がございますが、四海同朋運動ということになりますれば、なにも、いま、お念仏を称えておるものだけが同朋というわけではない。ふつう念仏の同朋といいますけれども、念仏は、だれでもが称えるべきものである。それが本願というものでしょう。

仏さまの本願というのは、一方的な本願というものではありません。仏さまの本願は、われわれが生れながらにしてもっている願い、だれでもがもっている願い、それは、いろいろ願いというものはあるけれども、基礎になる願いというものは一切の人類に共通した願いである。そこのところに仏の本願というものを感ずるわけでしょう。だから仏の本願は、仏さまが一方的に本願をおこされるということはありません。われわれの願いというものと深い関係をもっている。

だから、本願を誓願ともいいます。本願とも誓願ともいう。この誓いということは、また誓約ともいう。誓約ということは、まあ、諸君が学校に入学された、入学が許可になったときに誓約書というものを作って学校に提出される。誓約というのは、諸君が学校と約束をする。学校は諸君と約束をする。諸君と学校と相互に約束をする。こういうのを誓約という。このように誓うというのは約束という意味をもっている。約束というのは相互関係をもつ。

キリスト教の神さまには、別にそういうことはないので、一方的に絶対の権威をもって、そうして、天地万物を創造されたのである。だから、神を信ずるのは、われわれの義務である。神は、絶対の力をもっておるものだから、信ぜざるをえないように強制されておるものにちがいない。けども、仏教の方には、自由がある。強制されるというわけではない。ただ、仏さまとわれわれとの間に共通の願いというものがある。仏さまとわれわれとの共通の願いというものを、如来は、汝らの願いはこういう願いである。その願いを成就するために、如来は存在しておるのである、と、こういうのが如来の本願とか、如来の誓願というものである。

だから、宗教学とか、宗教心理学というものがあって、人間の宗教本能というものにまで堀り下げていけば、阿弥陀仏の本願を感ずることができる。それを感応という。われわれは如来を感ずることができる。すると、如来は、われわれの願いに応じてあらわれて本願をおこしてくださる。これが阿弥陀仏の本願というものであります。

2

それで、縁起という言葉もつかいますけれども、特に、因縁ということをいう。縁ということをいう。本願のご縁如来の本願を増上縁ともうすのであります。増上ということは、どういうことであるか。この増上ということは、二つの意義をもっておる。一つは与力、力を与える。自分だけの力ではいかぬから、増上の力を与える。それから、もう一つは、不障、無障無碍、さわりがない。増上は、この与力と不障という二義をもっておる。

特に、阿弥陀仏には不障ということが重大であります。さわりなしということは、阿弥陀仏の光明の徳をば十二光をもってあらわされる。無量光・無辺光・無導光・無対光・炎王光・清浄光・歓喜光・智慧光・不断光・難思光・無称光・超日月光と。

その中で、無量光・無辺光・無導光が一番重要なものであろうと思います。その無量光・無辺光を受けて、第三が無導光、この無導光というのが一番たっとい意義をもっておる。無量光ともいうけれども、親鸞聖人は、特に無導光仏という名前をたっとんでおられる。ご和讃などをみるというと、つねに阿弥陀仏を無導光仏と呼んでおられるのであります。

無導の導はさわり、障導。『阿弥陀経』には「舎利弗、彼の仏を何が故に阿弥陀と号したてまつる。舎利弗よ、彼の仏の光明無量にして十方の国を照らすに障導する所無し。是の故に号して阿弥陀と為す。」つまり、障導する所無しというのが阿弥陀仏である。

この無所障導ということは、われわれが如来を念ずるということも、やはり如来に無導光の徳があるから、念仏を成就

この無所障導ということのは、消極的な表現でありますけれども、もうひとつ積極的な表現がある。それが摂取不捨ということであります。摂め取って捨てず。『阿弥陀経』には、無所障導とある。が、この無所障導だけでは十分に意味が了解できないだろうというので、善導大師は『往生礼讃』の中に、「弥陀経及び観経に云く、彼の仏の光明は無量にして、十方の国を照らすに、障導する所無し。唯、念仏の衆生を観(みそな)わして、摂取して捨てざるが故に、阿弥陀と名づく」と。

『阿弥陀経』には無所障導とある。『観経』には摂取不捨とある。これは要するに無所障導であるから念仏の衆生を摂取して捨てないのであります。だから、『阿弥陀経』には、ただ無所障導と表現してありますのを『観経』に照せば念仏衆生摂取不捨ということになる。

せられてある。それで、無所障導が即ち摂取不捨である。障導があれば念仏することもできないし、また、念仏するものを摂取することもできない。阿弥陀仏には無所障導の徳というものがあって念仏衆生を摂取して捨てない。こういうので、善導大師は「弥陀経及び観経に云く」といって名義を釈されるわけであります。

3

本願成就の文によってみれば「諸有衆生、聞其名号、信心歓喜、乃至一念。」ここに聞其名号、その名号を聞くというのは、その名義、つまり名号のいわれを聞く。まあ『大無量寿経』全部が名号のいわれであるということでもありましょうけれども、しかし『阿弥陀経』には、特に、「彼の仏を何の故に阿弥陀と号す。舎利弗、彼の仏の光明無量にして障導することなし、是の故に阿弥陀と名づけたてまつる。」これを名義釈という。

『大無量寿経』には、この名義釈というようなものはありません。また、『観経』の第九真身観にも「光明偏照十方世界、念仏衆生摂取不捨」とあって、これも名義釈ということになっておりません。けれども『阿弥陀経』をもって『観経』を照せば第九真身観の文は名義を述べたものである。こういうことを頭において、『大無量寿経』の本願成就の文「諸有衆生、聞其名号、信心歓喜、乃至一念」ということを、親鸞聖人が聞信された。

名号のいわれを聞いて信ずる。聞くということが信の方法である。信がどうして得られるか、聞くということが信を成就する方法である。聞によって信を生じ、聞によって信は成就するものである。では、何を聞くのであるかといえば、名号のいわれ、名号の意義を聞くのである。それで、第十八願そのものが名義である。第十八願は、すなわち名義を釈するものである。

信というのも畢竟ずるに名義を知る。名義を、身に、心に知る、ということが、すなわち信である。信ということは信知である。この名義を信知するのであるということを『教行信証』では「行巻」から、特に「信巻」を開いて、

そうして、名号を聞く、と。

この名号を聞くというのも、名号に聞く。この頃は、西洋の学問が入ってきたものだから、名号に聞く、と。西洋の学問が入ってこないうちは、名号を聞く、と、そういうようにいうておったのだけれども、西洋の学問が入ってきて、名号に聞く、と。「大経に聞く」「阿弥陀経に聞く」「観経に聞く」。昔の人は「大経を聞く」「阿弥陀経を聞く」というておったんだが、いまは、「を」を「に」にして、そうして、聞其名号は、名号に聞く、と。名号を聞くというと、名義ということは、はっきりわからぬけれども、名号に聞くということになれば、名号の意義ということが非常に重大なものであるということを知ることができるわけである。

蓮如上人は「聞其名号、信心歓喜」ということ、南無阿弥陀仏の名義ということを、如来招喚の体が南無阿弥陀仏であるといわれる。

4

蓮如上人が、一番わかりやすく南無阿弥陀仏の意義を述べておるのが、「疫癘の御文」。この疫癘というのは、チブスのことでありましょう。昔の人はチブスを疫癘という。チブスが日本中に流行して沢山の人が死んだ。手のつけてみようがない。まあ、みなが怖れをいだいておる。そのようなときに蓮如上人が、『御文』を書いて、そうして、すべては定業である。「生れはじめしより定まれる定業」である。みんな驚いているけれども、驚くべきものではない。「さのみ深く驚くまじきことなり」。

因と縁に分けて考えれば「生れはじめしより定まれる定業」というのは因でありましょう。そして、疫癘は縁になる。この疫癘の縁だけ知っていて、因が、そのもとにある、宿業というものがもとにあるということを知らない。疫癘の縁だけ知っていて、因を知らぬから、因と縁と間違うて、ただ驚いておる、怖れおののいている。それで、縁

と因というものをよく知らんけりゃならぬ。そういうことを、極めて簡単で短い『御文』でありますけれども、明快にお話なされてある。

そして「この故に、阿弥陀如来の仰せられけるようは」という言葉でもって教えておられます。これは、極めて通俗的な言葉でありまして、「阿弥陀如来の仰せられけるようは、末代の凡夫・罪業の我等たらん者」、こういうのは文法として、どういうものか、よくわからぬけれども、「末代の凡夫・罪業の我等たらん者」。罪業というのは宿業ということ。生れながらの罪業、この罪業の結果として疫癘というものにかかっておる。「罪業の我等たらん者、罪はいかほど深くとも、我を」。我は仏さま。「我を一心にたのまん衆生をば、必ず救うべし。」これは南無阿弥陀仏を、こういうように蓮如上人が教えてくだされた。

『蓮如上人御一代記聞書』という書物がありますが、そこには、「弥陀如来の仰せられけるようは」と、手近かに教えてくだされてあるので「御文は弥陀如来の直説である」と述べてあります。つまり「聖人御一流は阿弥陀如来の御掟なり。されば『御文』には、阿弥陀如来の仰せられけるようは、と遊ばされ候。」これは、まあ、蓮如上人の弟子が、自分のお師匠さまのことを、ちょうちんもちしたと、このようにいう人もあるんでありましょう。けれども、ただ、ちょうちんもちしたというわけではないのでありまして、蓮如上人を非常にたっとび、信じておる。これは尊信した言葉でありましょう。『御文』は蓮如上人の言葉であるけれども、それは即ち阿弥陀の直説であると崇むべきたっとい聖典である、と、このように述べておる。

「道は近きにある。近きにあるのに、しかも人は遠きに求める」。これは孔子さまの言葉。蓮如上人は、ほんとうに極く近いところにお念仏を求めて教えてくださる。それで「弥陀如来の仰せられけるようは、末代の凡夫・罪業の我等たらんもの、罪はいかほど深くとも、一心に我をたのまん衆生をば、必ず救うべし」。必ず救うべしというのが阿弥陀仏のこころでありましょう。阿弥陀仏は、必ず救うべし。

「末代の凡夫・罪業の我等たらんもの、罪はいかほど深くとも、一心に我をたのまん衆生」、これは南無のこころでありましょう。この南無というのも、如来をたのむのは、われらが如来をたのむのでありますけれども、しかし、如来の大悲の力というものが、われらをして、たのまずにおれない自己と、また、たのましめたもう如来の御力を感ぜしめられる。そうして、如来をたのむ。

5

この如来をたのむということは、ほんとうの意味の、絶対自由ということでしょう。そうせずにおれないというならば、ほんとうの必然でありましょうけれども、そうせずにおれないから、ほんとうにそうすることができる。たのむことができる。だから、それは、ほんとうの意味の自由でありまして、単なる選択の自由ということではないんでありましょう。

たのむということ、そのことが、すなわち如来のおたすけである。如来をたのむということ以外に、別に仏のおたすけはない。仏のおたすけは、ほんとうに如来をたのむことができるということ。それが仏のおたすけである。たのむものをたすける、と。たのむは、たすけるの条件だ、と。たのむものはたすける、たのまないものはたすけない、というように、たのむは条件だと考えられるようだけれども、そうではないのでありまして、われらは、如来の念力が成就して如来をたのむということもできる。だから、たのむということ、そのことが、如来の本願成就であり、それがすなわち如来の救済である。たのむ以外におたすけはない。

如来の本願は、いかなるものも、一切のものを平等にたすけようというのでありましょうけれども、その一切のものをたすけるというこころを、われらにいただけば、如来をたのむということでありましょう。如来を信じるというてもいいでありましょうし、如来をたのむというてもいいのでありましょう。

けれども、大体、信ずる体がたのむ。南無阿弥陀仏というと、祈りの言葉ということになっている。仏たすけたまえということである。それで、法然上人の教えがあっても、法然上人のお心をいただかぬものにとっては、ひとつの祈りの言葉である。しかし、親鸞聖人は、名号のいわれを聞き開くということを仰せられた。ただ南無阿弥陀仏は祈りの言葉だというように、固定しないで、どこまでも名号のいわれを聞くところに、われわれの体験というものを成就するのでありましょう。いわゆる機法一体ということが体験として成立ってくるわけであります。

仏をたのむ以外に、おたすけはないのでしょう。如来を信じ、如来に帰命したてまつるということ、それがすなわちおたすけである。如来の念力というものが徹透する。それを、つまり信の一念という。親鸞聖人は、本願成就の文を「聞其名号、信心歓喜、乃至一念」というところで切ってしまわれた。それから「至心廻向」を「至心に廻向したまえり」あるいは「至心に廻向せしめたまえり」そのときに、われわれ全体が南無阿弥陀仏。われわれの身も心も南無阿弥陀仏になる。

6

清沢満之先生は、自分が如来を念ずるというと、自分の妄念妄想というものが全くなくなる。そういうものの起ってくる隙がない。如来が自分の心にみちみちてしまう。如来本願のお心が、自分の心にみちみちてしもうて、妄念妄想が起ってくる余地がない。全部が如来の本願となる。こういうようなことをいうておられます。

清沢先生は、仏教の専門語をつかわないようにしておられる。だから、如来を念ずる、他力の救済を念ずるという言葉で表現しておられる。如来を念ずるということは、つまり南無阿弥陀仏ということでしょう。だから、如来の招喚のお言葉を念ずる、それは「聞其名号、信心歓喜」ということをいわれるのでありましょう。如来を念ずるというと、如来の心が自分の心全体を占領してしもうて、自分の疑心自力、妄念妄想が起ってくる余地がない。自分全部が

南無阿弥陀仏となる。このように簡単に、そうして、専門語というものをつかわないでいうておられる。

はじめのうちは、いろいろ疑問をもっておるのでありましょう。しかし、結局、人生のことは不可知のものである。不可知のものであると知られて、どうにもこうにもならない。そこで、南無阿弥陀仏を念ずる。そこに、いわゆる機法一体ということが成立つ。機法一体ということもあるし、仏を念ずる心は凡心である。われらが起す心であるけれども、その凡心が転じて仏心となる。それを仏心凡心一体という。

7

曇鸞大師の『往生論註』をみると氷上燃火ということがある。氷上燃火というのは、寒いときに水が氷って、堅く厚い岩のような氷になる。そこで火を燃した。水の上で火を燃やすことはできませんけれども、水が氷になれば、そこで火を燃やすことができる。氷が固いものだから火がさかんに燃える。けれども、火が燃えるというと氷がとける。氷がとければ自然に火が消える。これを氷上燃火の譬えという。こういう有名な譬えが『往生論註』に『観経』の下品下生の悪人について述べるところに出ています。

つまり、自力の願生心というものは、法性無生ということを知らないで、実の生を執着する。だから、この生を終って浄土に生まれると教えております。浄土に生まれるというのだから、実の浄土、実の生というものがあって、そこに生まれると思う。われわれの思うとうり、楽しい世界が、この世界の他にあるものである、と、こういうように実の生を固執する。それを見生の火という。見は執、生は実の生である。

われわれは愚かなものであるから、教えを聞いても、教えを素直に聞けば実の生などないけれども、実の生を執する。これは教えに、なにかをつけ加えたのでしょう。わたしどもは、教えを聞くときには、ほんとうに自然法爾に、無我になって聞けばいいけれども、やはり自分の損得というような考え、人間は利己主義でありますからして、損得

というような考えで聞く。わたしどもには、第七末那識というものがあって、我痴・我見・我慢・我愛という四つの煩悩が生れながらにして具っておる。

教えというものは、これは方便。つまり、仏さまが人間をたすけるために方便して、人間の言葉というものを感じて教えというものをたてられたのであります。だから、往生というても、無生の生。「如来清浄本願の　無生の生なりければ」。生というても、生すなわち無生である。その仏さまの教えのとうりに聞いたというても、わたしどもは、教えのとうりに聞いたのでなしに、教えに何か人間の妄想をつけ加えているのでしょう。それを見生の火という。

はじめのうちは、氷が固いものだから、見生の火が燃えておる。その燃える熱によって氷がとける。氷がとければ火が消える。火勢が強いから氷が早くとける。早くとけるから火が早く消える。こういう矛盾でしょう。人間の妄念妄想の矛盾というものを、仏さまがちゃんと知っておって、そうして本願を起してくださる。

第十八の本願を素直に聞けば、「我が国に生れんと欲え」ということは、すなわち無生の生である。それを、実の生と執着して、自分は教えのとうり信じている、教えのとうり聴聞しておる、と思うている。が、だんだん聴聞しておれば、聴聞しておるうちに、見生の火というもの、妄念妄想が自らとけていく。

それで、清沢先生は、われわれが、ほんとうに如来を信ずることができるようになれば、如来のお心が、自分の心全体を占領して、そうして、われわれの妄念妄想というものの起る余地がないといわれる。それが真実信心というものでありましょう。ところが、われわれは、それを得るには、どうしたらいいか。こういうことを教えるために、曇鸞大師は、氷上燃火の譬えを説かれる。

見生は自力でありましょう。要するに、われわれの自力というものは、氷上に火を燃やしたようなものである。ちゃんと仏さまは、それをご承知で教えてくださる。われわれが一生懸命になる、真剣になるということは、見生の火が燃えあがるのでしょう。浄土は楽しいと聞いて、そうして浄土へ生れよう、と、こういうのは自力でしょう。自力

が強いというと、氷が自然法爾にとけて、見生の火が消える。そうして、無生のさとりというものを得ることができる。

8

だから、わたし思うに、第十八願について、一方には二十の願、一方には十七願というものがある。『蓮如上人御一代記聞書』をみると「憶念称名いさみありてとは、称名は勇(いさみ)の念仏なり、信の上は嬉しく勇みて申す念仏なり」とある。この「憶念称名いさみあり」というのは、覚如上人のお言葉でしょう。それで、憶念称名いさみありとはどういうことでございましょうかというて、あるお弟子がおたずねしたれば「真実信心の称名は、いさみの念仏である」。これは踊躍歓喜ということでしょう。「歓喜踊躍乃至一念」これいさみの念仏である。

『歎異抄』の第九条は、自分はそのとうりなれないというので、おたずねしたのでしょうが、それが、おのずからいさみが出てくる法を「親鸞も、この不審ありつるに、唯円房、同じこころにてありけり。よくよく案じみれば、天におどり地におどりてよろこぶべきことをよろこばぬにて、いよいよ往生は一定とおもいたもうべきなり。よろこぶべきこころをおさえて、よろこばせざるは煩悩の所為なり。しかるに、仏かねてしろしめして煩悩具足の凡夫とおおせられたることなれば、他力の悲願は、かくの如きのわれらがためなりけりと知られて、いよいよたのもしくおぼゆるなり」。いよいよたのもしくおぼゆるなり。これが、いさみの念仏でしょう。これを覚如上人が「憶念称名いさみあり」それを蓮如上人は「いさみの念仏」という言葉でもって、門弟たちを励まされた。

それで、わたし思うに、氷上燃火ということは、そういうことをあらわしている。つまり、二十の願というのは、氷上燃火をあらわしたものでありましょう。二十の願は「良に教は頓にして、根は漸機なり」でありまして、氷はたまたま固っているから火を燃やすことはできるけれども、やがて、火を燃やすことによって、氷がとけて、火が消え

てしまう。そういうことを二十の願というのでありましょう。

氷上燃火というのは、一面は二十の願であり、一面は十七願である。だから、わたしどもは、自力願生が強ければ強いほど、法の徳が強くあらわれてくる。だから、いさみの称名念仏というのは、第十七願をあらわしているのでしょう。二十の願、自力見生の火というものは、氷が固いものだから燃える。見生の火は自力念仏。お念仏は如来の本願であるけれども、そのお念仏のご精神に背いて、念仏はたっといものだと念仏に執着する。その念仏に執着するということが、如来の本願の力によって転ずれば、それが、いさみの念仏。そのいさみの念仏が十七願の大行。そういうことを『歎異抄』の第九条が教えてくださるのだと思うのであります。

9

浄土をねがう心がないというけれども、一時的には非常に燃えあがるようなことがあったのでしょう。それが、ある時期へ来ると、浄土をねがう心がさめてしまう。徹底しないで、願生心がさめてしまった。それで、氷上燃火というのは、歓喜踊躍を燃えあがらせる。そのために二十の願があるのでしょう。二十の願がなければ、念仏のいさみが出てこない。だから、二十の願というものがあって、おおいに燃えあがらせる。

「久遠劫より流転せる苦悩の旧里はすてがたく、いまだ生れざる安養の浄土は、こいしからず候こそ、よくよく煩悩の興盛に候にこそ。なごりおしく思えども、娑婆の縁つきて力なくしておわるとき、かの土へはまいるべきなり。いそぎ浄土へまいりたき心なきものを、ことにあわれみたもうなり」。ほんとうに浄土を願う見生の火をかきたてる。如来の大悲方便というものがあって、そうして、見生の火をかきたてるように教えていなさるのが第九条である。

二十の願あるが故に、諸仏称名の願というものが成立して、お念仏の徳が、法界のすみずみまでもとどく。「如来廻向の法なれば、功徳は十方にみちたもう」。われわれの自力の心の深いところに教えをたてて、そうして、わたしど

もに教えてくださる道が『歎異抄』の第九条である。そういうところから、いさみの念仏「歓喜踊躍乃至一念」。これは十七願、諸仏称名の願。わたしどもの自力執心の深いところに、裏と表と、二十の願と十七願とをたてて教えてくださる。

わたしどもに喜びがないのは、自力執心が深いからである。けれども、そういう自力執心の深いものを、特に如来があわれんでくださる。このように教えて、自力執心を転じて念仏の力、諸仏の証誠ということが成就される。諸仏の証誠ということを、どうして感ずることができるかといえば、自力の執心が深いから感ずることができる。

もし、われわれに二十の願、自力の執心がないならば、第十七願は出てこないんでありましょう。自力の執心が深いから第十七願を感ずることができる。それを極難信という。

『正像末和讃』に「十方無量の諸仏の　証誠護念のみことにて　自力の大菩提心の　かなわぬほどはしりぬべし。真実信心うることは　末法濁世にまれなりと　恒沙の諸仏の証誠に　えがたきほどあらわせり」。

二首続いて、一方に、諸仏の証誠護念によって、自力の大菩提心のかなわぬことを知らしめるのであり、また、真実信心のえがたきことをあらわすのである。内には真実信心のえがたきことをあらわし、外には自力の菩提心の成じがたきことを示すものである。このように、われわれは、自力の執心が深いから、それが転ずれば、いさみの念仏になる、と、このように思うわけであります。もう、時間ですから、今日は、ここまでにいたします。

（本稿は、さる昭和四十年九月三十日、大谷大学大学院における講義の筆録である。文責　伊東慧明）